# 笛吹市探訪

## シリーズ 第8回 石和地区

# 信光と石和御厨（みくりや）

治承四（一一八〇）年8月17日、源頼朝は平家打倒の旗を揚げ、伊豆国で挙兵しました。これから5年の間に源義経の活躍で知られる一の谷、屋島、壇ノ浦の戦いがあり、平家は滅亡しました。この源平の争乱期から鎌倉時代にかけて活躍した甲斐源氏のなかに、「石和」を名乗った人物がいました。武田信義の五男、武田五郎信光です。

元暦（一一八五）年に頼朝は平家討伐の大将として西国に向かっていた弟・源範頼に手紙を送っています。その手紙には「甲斐の殿原の中には、いさわ殿、かゞみ殿、ことにいとをしく申しさせ給ふべく候」とあります。文中のいさわ殿は信光を指しています。この手紙の内容から、信光は頼朝の信頼を得ていた人物であったことがわかります。当時、武家政権確立を図った頼朝や後に政権を握った北条氏は、たとえ源氏であっても敵対する勢力は削ごうとしました。実際、謀反の疑いで信光の兄にあたる一条忠頼は討たれ、武田有義は逃亡してしまったとされています。信光はこのような情勢の中、頼朝の信頼を得て、さらに鎌倉との関係を保ったことによって、治承の争乱期からその後の武家政権への変動期を巧みに生き抜きました。その結果、信光は鎌倉時代から戦国時代までの数百年にわたって甲斐を統治した武田氏の基盤を築いた人物と評価されています。

信光が拠点とした場所が『石和（いさわ）御厨（みくりや）』です。石和御厨は甲斐源氏結集の地としても知られ、治承四（一一八〇）年の富士川の合戦にはここから源氏の精鋭が出発しました。御厨とは、朝廷や神に献ずる魚介類を取る人である贄人（にえびと）に関係する施設のことを指します。本来、宗教的な意味をもった貢納物を集めておく場所でしたが、後に皇室や神社の所領のことをさすようになりました。石和御厨については伊勢神宮領であり、甲斐国で唯一確認される御厨です。信光の伝承地のなかに笛吹市石和町窪中島に所在する神明神社と石和町市部に所在する石和八幡宮があります。神明神社は伊勢神宮から、石和八幡宮は鎌倉鶴岡八幡宮からともに石和御厨内に移し祀られたとされており、御厨に関連する地名が残っていない今、その位置を推定する根拠となっています。『神鳳鈔』という書物には「甲斐国石禾御厨二百五十町」という記述があります。1町とはおよそ100m四方の範囲であるため、石和御厨は約2・5km四方の広大な範囲であったことがわかります。そのため石和御厨は窪中島の神明神社を中心に市部を北限として四日市場・広瀬・唐柏付近辺りに存在したと考えられています。現在この地域には新開町北遺跡、新開町東遺跡、観音寺前遺跡など平安時代の遺跡が分布しており、今後の調査研究においても注目される地域といえます。

「石和八幡宮（石和町市部）」

「神明神社（石和町窪中島）」

笛吹市教育委員会　社会教育課